

〈特集「アジアにおける平和の思想」1〉

インドの人々の平和観

——北インドにおける医療支援を通して感じたもの——

柴田昌雄

はじめに

第三四回比較思想学会大会のシンポジウムの「アジアにおける平和の思想」の中で、私がインドを担当するように指名された理由の一つには、私どもが一九八七年より北インドの農村部における医療支援活動を行ってきたことによるものである。それ故、以下に記述する内容は実際にインドにおいての医療活動の体験を通して、私が感じ取ったインドの人々の平和に対する考え方が中心となる。記述の順序としては、最初に今日まで行ってきたインドにおける医療支援活動の実際を述べる。次にインドの人々、特に庶民の平和に対する思想を述べ、更にインドの国家としての平和の理念を考えたい。最後は、現在におけるインドの政治、経済の状況を述べ、インドが今後平和に対してどのような指向性を持つ

かを論じてみたいと思う。

一 インドにおける

医療支援活動の歩み

私どもが北インドの農村部に医療施設（病院）を建設しようと思ったのは、全くの御縁であったと思っている。一九八六年にインドの現地の人々から要望があり、一九八七年五月に病院建設委員会を立ち上げた。その折の趣意書は次のごときものである¹⁾。

趣意書

先の太平洋戦争より四十有余年が経過し、我が国は今や世界の経済大国の一つとしての地位を占めるに至り、我々日本

国民は未だかつて経験しなかった物質的な豊かさを満喫しております。しかしながら、ひとたび視野を地球的規模に広げたと、貧困と飢餓に苦しむ数多くの人達が存在していることに気付きます。

この様な視点をアジアのみに限定しても同じ状況にあります。日本はアジアの一員として、アジアの人々とともに歩むべき責務があります。特に中国および東南アジアの諸国についての関心は今日急速に高まりつつありますが、アジアの中央に位置し、中国について世界第二の人口を有するインドについての日本人の関心は、いま一つ十分とは云えないと思います。

云うまでもなく日本人はその九割以上は信仰の程度の差はあれ仏教徒です。仏教はインドの地において釈尊によって創生された宗教であり、我々日本人は仏教を有形無形の形でその人生観に生かしております。

いま一度、釈尊より二千五百年を経過した今日のインドの姿、とくにその民衆の生活を見たとき、それは我々の想像を越えた苦しいものであります。特に人間生活の基本条件の一つである医療の面ではその遅れが顕著であります。

この度、釈尊成道の地である中部インド、ブダガヤの地元官民の方々より、是非とも近代的医療施設の建設の要望が寄せられてきました。我々発起人一同はこの地元よりの要請を

幾度にもわたり検討し、さらに現地にも行って調査した結果、我々の手で仏教の聖地ブダガヤの地に規模は小さくとも、インドの民衆の方々に役に立つ医療施設（病院）を建設することを発願した次第です。このためには建設のための資金が必要であり、皆様方に募金をお願い致す次第であります。何卒、我々の意をおくみ取りいたゞき御懇志を賜ります様、心よりお願い申し上げます。

一九八八年七月

合 掌

その後多くの困難な問題も存在したが、多くの方々の御支援により一九九八年一月に病院がオープンでき、診療を開始することができた。この間の詳細な経緯については、本比較思想研究²⁷⁾号に投稿しているので参照願いたい。以来、今日（二〇〇七年五月現在）までの約八年半の間に総数一七万人の地域の患者を治療することができた。現在も一日七〇—一〇〇名の患者が来院しており、その地域の人々にとってはなくてはならない病院となっている。私どもは今後とも何としてでも医療支援活動を継続する考えであり、有縁の方々の御支援を切に願う次第である。

二 インド国民の平和の思想

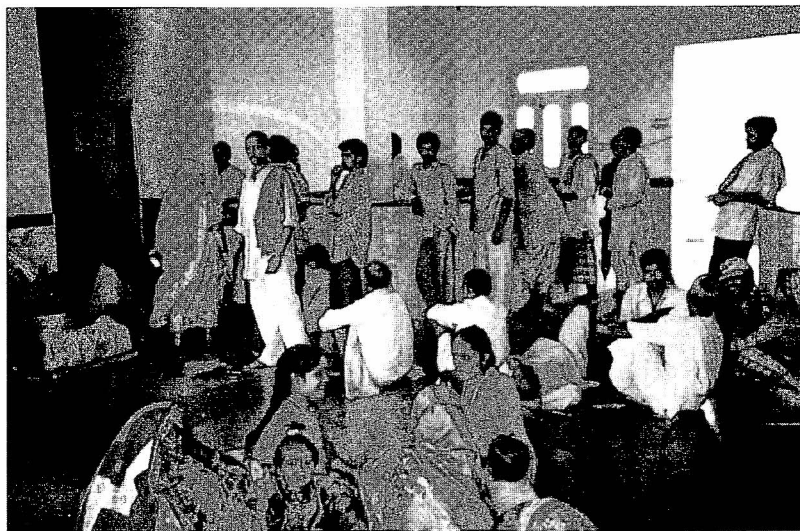
インド国家の現状について概略をまず述べる。面積は約三二八

写真 1



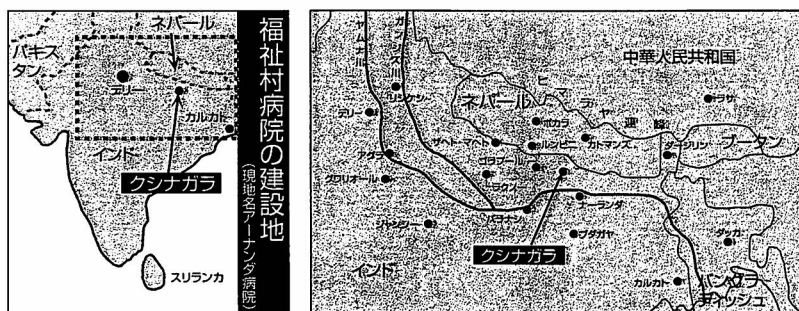
病院の全景（病院名インド福祉村病院、現地名 Ananda Hospital）

写真 2



待合室の光景

図 1



ANANDA HOSPITAL TEL : 91-5564-217544 / 91-5564-292935

住所 : VILLAGE SIRSI DIST KUSHINAGAR 274403.UP.INDIA

病院の所在地

万平方キロメートル（日本の九・五倍）である。人口は一〇億三〇〇〇万人（二〇〇一年国勢調査による）、人口増加率は一・九五%（年平均）であるので二〇〇七年現在では約一億五〇〇〇万人近くに達していると思われる。また多民族国家であり、連邦公用語はヒンディー語であるが、公認されている言語は二二もある。一般的には英語が準公用語として繁用されている。

宗教に関してはヒンドゥー教徒八〇・五%、イスラム教徒一三・四%、キリスト教徒二・三%、シク教徒一・九%、仏教徒〇・八%、ジャイナ教徒〇・四%（二〇〇一年国勢調査による）である。インドの民衆はそれぞれの宗教を信仰し、日常生活のなかに宗教がある。私が見聞したヒンドゥー教徒は日々の生活の中心に神があり、神に祈りながら懸命に生きているように感じた。特に農村部では貧困、カーストなどの問題は今なお大きく存在しており、農民らの生きる力の根源には宗教が大きく関わっている。私どもが病院を建設したウッタール・プラデーシュ州（UP州）は人口一億人、面積は日本全土より北海道を除いたぐらいの大きな州である。ここでもヒンドゥー教徒とイスラム教徒の比率は前述の全インドの比率と大差はない。彼等のなかでヒンドゥー教徒とイスラム教徒は共生しており、何ら問題は起こっていない。彼等はまず家族、次に地域の平穏無事を考えている。これが彼等の平和の思想の原点と思われる。彼等の心のなかではマハトマ・ガンジーは今なお尊敬されており、彼の平和思想は生きている。ガ

ンジーの平和思想はヒンドゥー教の不殺生の戒律の影響を少からず受けていると私は思っている。

三 インドの基本的外交姿勢

インドは独立以来ネルー首相によって提唱された平和五原則を外交の基本としている。(一)世界各国と友好関係を構築し、共存を探る。(二)国際問題はあくまでも平和と裏に解決する。(三)主権の平等と尊重。(四)国家の思想と行動の自由。(五)国家間の関係はあくまでも平等対等の原則を重視する。以上の五項目である。

二〇〇六年三月にアメリカのブッシュ大統領がインドを訪問し、マンモハン・シン首相との間で「二一世紀の地球規模の諸問題に対応し得る戦略的パートナーシップ」関係における歴史的な合意に達した。その折に行われたブッシュ大統領夫妻の歓迎晩餐会において、シン首相は挨拶のなかで「我々は近隣諸国の平和と繁栄を望んでおり、この亜大陸は世界の偉大な数々の宗教の発祥の地であり、人類の原動力の拠点であった。知恵と先見性をもって我々はこの南アジア地域のみならず全世界を変えることも可能である」と述べている³⁾。

すなわちインドの外交姿勢、とくに周辺諸国との関係を要約するならば、互いの内政不干渉の立場を明確に示し、互いの主権と領土の保全の原則を守ることにある。しかし、現実的にはカシミール地方の帰属問題という大きな領土紛争があることも事実であ

る。

四 インドの核をめぐる問題

インドは独立以来核の全面廃絶と軍縮を強く叫びつづけてきた。しかし、一九九八年五月に核実験を断行し世界で六番目の核保有国となった。その理由としてインドは中国とパキスタンからの軍事的脅威に対処するためであると発表した。インドは核保有はあくまでも抑止目的のものであり「先制不使用」を宣言している。このような公的な立場の理由のみではなく、武蔵は次のような理由が大きいのではないかと述べている。すなわち核実験の実施に際しては、国内政治への配慮が優先したものと考えられる。当時政権の座を勝ちとったインド人民党(BJP)は全国政党としての資質を欠くという状況にあった。BJPの選挙綱領には「政権担当の暁には、核問題についての態度を明確にし、核実験を実施することによって、安全保障の面でのインドの地位を向上させる」とあり「公約を守る強い政党」とのイメージを国民に示すことが重要であり、核実験に踏み切ったのではないかということである。

更にもう一つの点は包括的核実験禁止条約(CTBT: Comprehensive nuclear test ban treaty)との関連についてである。従来からインドはCTBTに署名を拒否してきた。しかし国際的な批判も高まり、フランスの例に習って、CTBTに署名する前に

核実験を行って核保有国になる方が有利との考えに立ったのではないかと推論している。しかし未だCTBTには署名していない。世界で唯一の核被爆国である日本としてはインドの核実験に対して反対の立場をとることは当然であり、インド側も納得せざるをえないと思う。しかし、日本は現在アメリカの核の傘の下に入っており、国内のエネルギーも大きく原子力に依存している。この現実をインドに対してどのように説明すべきか？ 今一度われわれも深く考える時機ではないかと考えている。

五 ヒンドゥー至上主義の台頭

一九九〇年代のインドのIT産業は驚異的な発展をとげた。その理由の一つとして榊原^⑤はインドには知や精神性に対する高い評価を伝統的に持ち続けてきたことによるであろうと述べている。そこには精神文明の一つの成熟したものを見ることができ、宗教、哲学、数学、コンピュータが一つの糸でつながり、二一世紀の新しい知の時代にインドが飛躍していく可能性が大きいとも云っている。

このIT産業を主軸としての経済成長によってインドでは中間層と呼ばれる人々が全体の二〇％に達した。その数は約二億人であり、巨大な消費者が出現した。しかし、その反面この経済成長に取り残された人々との間に経済的格差が大きくなってきた。二〇〇五年の国連の調査によればインドでは一日二ドル以下で生活

する貧困層が全人口の七九・五％であり、さらにその中でも下流の三五％は一日一ドル以下の最貧レベルにあるとされている。つまり約四億人の人々が貧困にあえいでいるのが現実である。^⑥

このようなインドにおける社会的背景のなかでヒンドゥー至上主義（ヒンドゥーナショナリズム）が台頭してきた。このヒンドゥーナショナリズムを政党の基本に据えているBJPが一九九八年には政権を握るまでになった。従来のインドが国家政策の基本としてきた世俗主義が危うい状況になっているとも思われる。またガンジーが独立運動を展開していったなかで、ヒンドゥー教徒の政治参加を促すために、ヒンドゥーという宗教を政治の次元に持ち込んだことが、今日インド社会の一部で起きているイスラム教徒とヒンドゥー教徒との対立につながっていると小川^⑦は論及している。

格差がますます増長している今日のインドにおいては、ヒンドゥー至上主義は下流に生きる民衆の強い支持を受けていくことであろう。多様性国家であるインドの平和は、真の共生社会を実現させること以外にもたらずことはできないと思う。しかし、ヒンドゥー至上主義は他者を排除する志向をもっており、今後の動向に注意し、インドの平和に対してどのように行動していくかは予断を許さないと思われる。

おわりに

従来の「平和を構築する」考え方は、今日のテクノロジ（IT）の時代には必ずしも適切でない面があると考えられる。つまり今や世界はグローバル化が進み、地球上のどこかで起きた現象は瞬時にして全地球上にその情報はもたらされ、直ちに何等かの反応が起きる状況となっている。

今日のインドはアルビン・トフラーが「第三の波」⁽⁸⁾で述べている論旨に従えば、第一の波（農業社会）から第二の波（工業社会）をスキップして第三の波（IT時代）に入っていると考えてもよい。今世紀に入りインドは飛躍的な経済成長をしているものの、その陰では格差の増大、宗教対立など問題は山積しており、この亜大陸の平和の構築はそんなに容易なことではないと思われる。このような状況下ではインドの国民一人ひとりの理性と大きな努力が必要であると考ええる。

北インドのローカルな農村地域の人々の平和を望む思想が基本的には最も大切なものであると考える。このローカルな地域での平和の構築の集積がインド全体に、さらにはアジアの平和にとつながっていくものと考えている。

(1) 表1の趣意書には建設場所をブダガヤと記してあるが、その後の諸般の事情により釈尊入滅の地クシナガラに変更した。

(2) 『比較思想研究』第二七号別冊、二〇〇〇年五一～五四頁

(3) Pema Gyalo『国家政治再編の焦点 インドの実像』中央公論、一八八二〇二頁、五月号、二〇〇六年より引用

(4) 武藤友治『変わるインド 変わらないインド』九〇～九二頁、二〇〇六年（勉誠出版）

(5) 榊原英資『インドIT革命の驚異』三二～三三頁、二〇〇一年、文春新書

(6) 中島岳志『インドの時代、豊かさと言苦悩の幕開け』一八二頁、二〇〇六年、新潮社より引用

(7) 小川忠『インド多様性大国の最新事情』一四九頁、二〇〇一年、角川書店

(8) Alvin Toffler『第三の波』一九八〇年、日本放送出版協会

(1) しばた・まさお、臨床医学、元愛知学院大学教授